

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 22号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成
二十五
年十月
第二
十二号

< 2013年 10月 >

古賀 順子

アニエス・ルテスチュさよなら公演

10月に入っても暖かい日々が続いていたパリですが、10日を境に急に寒くなりました。風が冷たい10日夜、アニエス・ルテスチュのパリ・オペラ座最後の舞台「椿姫」を観に行きました。

パリ国立オペラ座は、エトワールの引退を42歳に定めています。シルヴィー・ギレムのように、オペラ座を退いて今なお現役で踊っているダンサーもいます。女性に限って言えば、現在10名のエトワールがいます。アニエス・ルテスチュは、1997年「白鳥の湖」公演後エトワールに指名されます。翌98年オーレリー・デュポンがエトワール。90年代の最後の二人です。70年代生まれのアニエスやオーレリーを引継いでいくのが、2007年24歳の若さでエトワールの座についたドロテ・ジルベールを始めとする80年代生まれの世代。若くて初々しく、新鮮な魅力に溢れるエトワールが誕生するのは、見ているだけでも心が踊ります。それに対して、内面の深い表現を極めたエトワールの引退は、事を成し遂げた人の感動に胸を打たれます。

バレエ「椿姫」は、アレクサンドル・デュマ(息子)の小説「椿姫」(1848年)をもとに、1978年ジョン・ノイマイヤーが舞台と振付けをし、3幕バレエになります。青い色調の上品な舞台で、19世紀の衣装もとても綺麗です。デュマ自身が恋に落ちた実在する美しい高級娼婦マリー・デュプレッシが、マルグリット・ゴチエの名でバレエの主人公になります。バレエでは、もう一つの有名なフランス恋愛小説「マノン・レスコー」(1731年アベ・プレヴォー作)のマノンと騎士デ・グリユーの悲劇的な恋愛が重ね合わされています。マルグリットを踊るのがアニエス・ルテスチュ。恋

人アルマン・デュバル役には、2010年エトワールになったステファンヌ・ビュリオン、33歳。小柄ですが、高さスピード感、正確な動きが素晴らしく、複数のパトロンを持つ高級娼婦マルグリットに恋する青年役にぴったりです。

アニエス最後の公演だけあって、オペラ座は満員。入り口でチケットを探している人の姿もありました。長身で美人、優雅、申し分のないテクニックに、知的な表現、女性らしい細やかな動きができる独特の世界を創るバレリーナです。クラシック・バレエは見た目も綺麗ですが、より高くより美しく跳ぶ力と、上へ上へと伸びる四肢に心打たれます。完璧に出来るまで何度も繰り返された動きは、見る人の心を高いところ、光溢れるところへと導き、魂を浄化してくれると思います。さらに、ショパンのピアノ曲が美しく響きます。バレエのための曲ではなく、踊り難いのだと思える箇所もありますが、アニエスとステファンヌのデュオは心奪われる美しさです。あっという間に時間が経ちます。きらきら光るラメ片の花吹雪が舞うカーテンコール、全員立ち上がり、心からの拍手が続きました。満たされた気持ちで夜のパリに出ました。

実は、バレエを観る前に悲しい知らせを受けました。パリ通信5月号で紹介させていただいた「モネノート、モネ新発見、人は360度花の綺麗に囲まれるべし」の著者小原正夫氏が亡くなりました。頑張って闘病生活を続けておられましたが、10月1日逝かれました。自然を愛し、芸術を尊ばれていた方です。バレエの後、パリの夜景を見ながら、生きていることをおろそかにしてはいけないと思いがしました。小原正夫氏は、芸術がなぜ人の心を清らかにしてくれるかを、いつも考えておられました。残された私たちは、生きていることに感謝し、小原氏の芸術への思いを引継いでいきたいと思えます。心からご冥福をお祈り致します。